八戸ブックセンターのこれまでとこれから

藤谷治 小説家

八戸ブックセンターにお招きいただいたのは、2020年2月の閏末日のことだった。僕が東京の下 北沢で毎月開いている「文学の教室」を、八戸でもやってみようという企画だった。

空気はひんやりと乾いていたが、雪はほとんど残っていなかった。

「もっといい時に来たかったですよ」

迎えに来てくれたブックセンターの方に初対面の挨拶をするとすぐに、そう言ったのを憶えている。 コロナ禍、という言葉もまだ定着していなかった頃だった。新型コロナウイルスに罹患している人 は、集団感染したクルーズ船の乗客を除いて、東北地方にはまだ一人もいなかったはずだ。治療 法はおろかワクチンもできておらず、東京は日々不安にさいなまれていたが、青森ではまだそれほど の危機意識は感じられなかった。とはいえ無論、マスクやアルコール消毒はすでに慣習化してい た。歩いている人の顔が見えない時代が始まっていた。

八戸ブックセンターは東京でも青山あたりにしかなさそうな、洗練された空間だった。シャレているのに敷居が高くない感じで、お母さんに連れられた小さな子供が絵本をわきに抱えながら、本棚を見上げていた。ギャラリーでは滝口悠生さんと柴崎友香さんの滞米記を見せていた。滝口さんは小説家になる前からの知り合いである。弱みも握っている。今では柴崎さん同様、押しも押されもせぬ立派な芥川賞作家である。

アメリカの話を書いたり写真を飾ったりしている滝口さんと柴崎さんの仕事を見ながら、つくづく思った。僕もお二方も東京に住んでいる(多分)。しかしだからといって、用事もないのにそうたやすく会えるものでもない。けれども東京から遠く離れたところでこうして、お二人がどこで何を考えたか、何を見、何を感じたか、垣間見ることができる。それはやっぱり、文学のおかげだ。東京と八戸のあいだ、八戸とアメリカのあいだ、そんな距離など、文学にはなんの懸隔もない。文学は僕たちをつないでくれる。

八戸での「文学の教室」では、夏目漱石の『草枕』について語った。『草枕』は短い小説だが、 出自も育ちも性格も違う様々な人間たちを、見事に描き分けている。しかもその中に、漱石の遁世の 心や自然への憧憬、人間に感じる薄気味悪さと美しさが込められている。

夏目漱石は明治大正の人で百年以上も前に死んでいる。話などもちろん聞けやしないし、たと え今が明治でも、東京帝大の偉い先生だった漱石に会うことなんかできなかっただろう。会っても 大した話は聞けなかったかもしれない。けれどもその文学を読めば、漱石という人の心が伝わって くる。どこにいようと、いつであろうと。

その夜はスタッフの方々にお誘いを受けて夕食をご一緒した。八戸はナイトライフが充実していると人から聞いていて、実際あたりを見ると屋台村があったり、人の行き来も盛んだった。屋台の外で語り合う若い人たちなと見ていると、なんだか1920年代のパリさえ思わせる。こういうところに未来のフィッツジェラルドが、将来のヘミングウェイがいるのかもしれないと、空想するのは楽しかった。この空想に八戸ブックセンターの「これから」が関わっているのは間違いない。

藤谷治 osamu fuiitani

小説家

執筆・出版ワークショップ「フィクショネス 文学の 教室in八戸」「小説は君より大きく、君は小説よ

り大きい」(2020)

「中高生に伝えたい三浦哲郎」(2021)

し、そのかたわら創作を続け、2003年『アン ダンテ・モッツアレラ・チーズ』(小学館)で 作家デビュー。著書に『小説は君のために

ある』(筑摩書房)など。

1963年東京都出身。1998~2014年に東 京の下北沢で本屋「フィクショネス」を経営

